

明治時代

NO.

16

DATE

100 山岸澤次

□ 山岸喜代太夫

先代喜代太夫の弟子にして、後年、後瀬太夫と号し、先代後瀬太夫の弟子にも上り、余り上手なり、由三役目にて終り、半止新水川山に留む

101 初代 山岸和佐太夫

後四代目若太夫、又若前

若太夫の弟子にして、三登勢太夫役後、吹網にて三代目仲助と号す、常に出

102 山岸國太夫 (長六、明治九) 初代山岸式登太夫

野州足利に生れ、愛服高を管みりたり、後江戸に出、実子彦太夫と号人とするに就き、自分もその次から四代目吉武部の内に在り、慶応の末、年々式登太夫と云い、明治三年、山岸國太夫と改り、ワキ役となる、明治九年八月三十日、改り、享年六十八、本所押上成徳寺(後小松門移転)に葬り、法名琴々山高調士

103 □ 山岸組太夫

初代、初代常磐若津小代太夫

赤坂氷川内家に住む、合製前、山岸組太夫と云う、山岸組に入つて組太夫と改名、上り、何れも、三登勢太夫と同年、巻物にて役目にて終る (志書太夫譜)

104

□ 岸次兼太夫 (文政五—明治二〇) 初年常磐津八重太夫

小田原藩の武家に生れたるも音曲を好み江戸に出て常磐津と  
呼ぶ字政二年八島太夫となりしが、常磐津岸次介助後山岸次  
なり。岸次兼太夫と改め明治初年より三年改まじりて  
芝居に出勤せしが、後太夫を燈籠業にて岸次家元の行事を勤めたり  
明治二十年十月九日六才の若く歿す。松巖仙舟信士、当時式三郎と  
今の岸次九尾けその実子なり

105

□ 岸次登美太夫

三登勢太夫の弟子。古河に生る。桶留といふ桶取にて新内語りたりと  
同地の太田屋大兵衛と云う落座じ。三登勢太夫、武佐を鼻頭履也とい  
はく、古河へ招に縁故から同人の膝下にて岸次より、登美太夫と  
なり。そのお時は馬道の式佐の家で居ながら、本所から下目に住んでい  
頗る美音と上りし上りである。明治三三年の改めりて、其佐に  
出勤し、四才の若く早歿す。 (志事太夫談)

106

□ 岸次佐喜太夫

今の式佐の伯母にあはる。

107

□ 岸次千歳太夫

神田に住む、片眼の男なり。ワキまをゆく、徳心元年に三十八才なりし  
登美太夫と同格であつた。一才の童女れを引込んぬ (志事太夫談)

108 □ 岸沢 吾妻大夫 (弘化三—) 初め丸大夫、次は仲大夫

九巻の謀によれば、仙台の髪結床の伴なり、三登新助大夫の連れ来り、初名を仲大夫と云い、岸沢に入りしを、吾妻大夫となり、明治三年五月、中田庵に始り、中三番目に出じ、同四年春より、ワキと云れり、其後田舎へ引込り、一度上京し、もソコを病し、再心歸郷し、窮死せりと、神田富松所仕仕玉。

109 □ 岸沢 小佐大夫 後若所茶屋、和泉屋の息子なり

110 □ 岸沢 綱太夫

菓子屋職人なり、始め八重太夫と云れり、小き大夫と云り、綱太夫と云り、百子、大きな声に芝居向きなり (九巻談) 三宮宮下所仕仕玉、明治八年昭「諸昔人名録」上巻、大夫と云り

111 □ 岸沢 千スト 大夫 九巻の弟子に、宮下所仕仕玉の大夫なり、芝居に出ず (九巻談) 湯平下中、右之内所仕仕玉

112 □ 三 岸沢 八重太夫 通稱を水や可と云え、神田本場者なり、或三宮の弟子に、宮下所仕仕玉、芝居に付關係なし、中々美音なりし (九巻談)